

「かたち」の博物館によるこそ

長 雄一

「かたち」たちの世界へ・・・

博物館の標本庫に行くと鳥の標本、剥製あるいは全身骨格が薄暗い光の中でたたずみ、野山や海で空を飛ぶ鳥を見て過ごす（今年の夏はエトピリカの餌運びを1ヶ月以上観察してきた）私たちにも何かを語りかけてくる。生物標本は、分類学、系統進化学、形態学、生理学、そして生態学といった広い学問分野の研究者にとって有益な情報とアイデアをもたらす。ここでは私の学位論文のテーマでもあった「機能形態学」（生物デザインの意味を探る学問）について話題を絞ろう。私が感じた「かたちの驚異への感動」を皆さんにお伝えできたら幸いである。わが国では航空力学的観点から動物の飛翔についての研究があり、鳥類学としては黒田先生の非常にすぐれた研究がある。形態学というと、古くさく感じられるかもしれないが、生物が個体として機能するための基本部分を研究する、重要な研究分野である。とくに大型で揚力や慣性力を利用する鳥類は、この分野の研究材料として興味深い対象であると考えている。

「かたち」は「大きさ」を持つ

大部分の鳥は空を飛ぶ動物であり、その翼を飛ぶために使う。しかし、中には翼を使って水中を泳ぎだした種類もあり、ペンギン類はその代表である。ペンギン類の前肢骨は、飛翔性の鳥類、例えばカモメ類に較べて上腕骨等の幅が広く頑強であり、空中飛翔性と水中遊泳性をあわせもつウミスズメ類はこれら2グループの中間型を示す。人為的要因により絶滅した飛べないオオウミガラスの前肢骨は他のウミスズメ類



電波発信器を装着したエゾシカとともに
北海道環境科学研究センター自然環境部
野生動物科（私の職場）提供

に較べて、さらにペンギン類へと形態的に類似している。以上はStorer (1971) を始めとする従来からの考え方であったが、この考えには身体全体及び翼の「大きさ」の情報は付加されていない。これら形態グループについて前肢骨の計測を行い、「大きさ」を考慮にいれ、機能形態学的解釈をおこなった。その結果、上腕骨の体重に対する断面積プロポーションには、ペンギン類とウミスズメ類で差がなく、高い滑空飛翔性を示すアホウドリーミズナギドリ類の方が、前出の2グループに較べ、体重に対する上腕骨断面積プロポーションは高いという意外な結果が得られた。この傾向の背景には、空中飛翔と水中遊泳時に動物が利用する媒体、空気と水の特性の違いがある。

「かたち」は「ながれ」とともにある

私たちは空中を飛ぶことは出来ない。しかし、

巻頭言

水中を飛ぶ（普通は泳ぐというが）ことは出来る。なぜか。水は空気に較べて密度と粘度が高い。つまり、水中では空中に較べて移動抵抗が大きい。動物の身体の大部分は水であることから、水と動物の密度は近い。このことから水中において動物には重力と同等の浮力がかかっており、重力に対抗して水中では身体を浮かすことができる。

ここで、先の前肢骨の問題に戻ってみよう。翼を使い飛んだり泳いだりすると前肢骨に「曲げようとする力（以下、モーメント）」がかかる。私たちは、水中よりも空気中の方が、手を動かす時の抵抗が少ないことを知っている。骨の耐えるモーメントには限りがあるので、水中で駆動する場合には、翼サイズを小さくするか、羽ばたき頻度を下げる必要がある。空中飛翔しないペンギン類は、空中で揚力を発生させる必要がないため、翼サイズを小さくし、内部構造を強化することを選択した。つまり、ペンギン類の前肢骨は、単に頑強化しただけではなく、コンパクト・凝縮化（骨密度が高くなって）して、翼へのモーメントに耐えている、といえるだろう。

エンペラーペンギンの「かたち」

サイズによるメリット、デメリットは飛ぶ鳥と潜水する鳥とで大きく異なる。身体の大形化は熱代謝の面で有利であるが、飛ぶ鳥の場合、水平飛行可能な高度まで身体を持ち上げるのに必要な力は体重に比例し、前肢骨が耐える力はその断面積に比例するために、体重増加とともに前肢骨の強度が不足する。これに対して、潜水する鳥では、水中遊泳に必要な出力は胸断面積や翼面積に比例するので前肢骨の強度不足による体重リミットはない。その場合、体質量が大きくなると、慣性力のせいで加減速能力（つまり操縦性能）は低くなるが、酸素の保有量を大きくすることができる。とくに、筋肉中のミオグロビンと結合した形で酸素を蓄えることで、水圧による潜水病が回避できる。現生種で最大サイズのペンギン類であるエンペラーペンギンは、最大潜水深度400m以上という驚くべき潜水能力を持つ。その全身をCTスキャン

して連続断面（体軸に直交な面）を作成したところ、胸部断面は円形であり、体腔断面も円形を示し、頭から尻尾まで体軸に沿った「かたち」はほぼ中央部に胸断面積のピークを持つ紡錘体であった。また、身体の大部分に胸筋を主とする筋肉が分布しており、胸筋の体積は全体の約30%にもなった（エトピリカは約18%、ウミネコは約14%）。この強大な筋肉系には、海中を高速に泳ぐためだけでなく、酸素タンクとしての機能、防圧壁としての機能も考えられる。まさにエンペラーペンギンの内部構造は潜水艦のようであり、その翼構造は羽ばたき型のスクリューであった。

「かたち」たちは語りかける

人間の捕獲によりこの世界からオオウミガラスは絶滅したが、その標本（死んだ「かたち」）は残り、彼らが長い進化時間の中で作り上げたペンギンに似た構造の前肢等の「かたち」は、私たちに水中遊泳性の進化についてのインスピレーションを与えて続けてくれる。これからも博物館や各研究機関において、多くの生物標本及び生物情報が保存され、多様な生物の「かたち」の提示及び再構築を通じて、世界がいかに豊潤であり（近い将来、「豊潤だった」になるかもしれないが・・・）、適応進化がいかに精密なものか、を伝え続けるだろう。このことは、一つの重要な学問分野であり、環境教育等の素材になるといえるだろう。また、飛翔及び遊泳等の「機能分化」を数量化し、適応放散の状況を見て行くという新しい進路も考えられる。このように機能を持つ「かたち」は、この複雑な世界を知る上での「スケール（物差し）」の一つである。さらに生物自体を外部環境と区切られ恒常性を保たれた一つの「かたち」と定義するならば、生理学や行動学との融合（エンペラーペンギンの潜水機能解析は一つの例である）も我々の進むべき方面の一つであると考える。

（北海道環境科学研究センター自然環境部
野生動物科）

第22回国際鳥学会議に参加して

山口 恭弘

第22回国際鳥学会議は、1998年8月16日から22日にかけて、南アフリカのダーバンにて開催された。参加者は70ヶ国、1300人にもものぼった。南アフリカの治安の悪さを日本を発つ前から、たくさんの人に言われ続け、多少（多大？）の心配を胸にダーバン空港に降り立った。この小さな空港では学会のボランティアの人が笑顔で迎えてくれたのがうれしかった。

学会は初日がRegistrationの日になっており、夜にはWelcoming Ceremonyが開かれ、アフリカ音楽を聴きながら立食形式のパーティを楽しんだ。次の日からはいよいよ学会の本番となり、1日の中日（Open day）を以て、前半3日、後半2日のハードスケジュールが始まった。プレナリーは毎日2講演ずつ行われ、その時間は他の発表等がないこともあり、ほぼ全ての講演を聞いた。質の高い講演が多く、つたないヒアリング能力でも楽しめるものが多かった。口頭発表とシンポジウムは同じ時間帯にテーマごとに分かれて行われ、9会場フルに使って行われた。もちろん、聞きたいテーマを選んで聞きに行くのであるが、似たようなテーマが違う会場で行われていたり、聞きたい話がだぶっていたりするのはどの学会でも同じであるという印象を受けた。口頭発表は全部で15テーマに分かれ、それぞれ8講演ずつ行われた。いくつかのセッションを聞いたが、質の高いものから、低いものまで様々であるという印象を受けた。国際会議だからといって、必ずしも質が高いものばかりではないと考えさせられた。シンポジウムは51テーマ、ラウンドテーブルは35テーマに及んだ。個人的には口頭発表よりもシンポジウムの方がまとまりがあり、聞いていて楽しめた。また興味のあるテーマも数多くあった。

ポスターは10のテーマごとにまとめられ、全部で約500にもものぼる発表があった。内容においてもディスプレイにおいてもその質は様々であったが、1枚の紙に印刷したものや、商用ポスターと見間違えうばかりの美しいポスターが

目についた。発表においてはもちろん内容が重要なものではあるが、やはり美しいポスターに目が行き、足が止まるのも自然であるという気がした。日本の学会と違い、けた違いのポスターの量であることもあり、ポスターに殺到するという場面が見られず、自分の興味のあるポスターのみをじっくりと見ていくようであった。そのような時には、このような目立つポスターで多くの人に見てもらおうというのも一つの手ではあるなと感じた。またポスターの内容をレジメにして配布している人もあり、これもよい方法であると思った。

ポスター自体は初日から最終日までずっと貼っておいてよく、そのために空き時間などにゆっくり見ることができ、大変有効であった。ポスターには通し番号がつけられ、発表一日目が全員、二日目以降は偶数と奇数が一日交代という発表担当となり、約2時間の発表時間が、毎日あてられた。

私自身は大学院での研究であるムクドリの種類内托卵について発表した。発表自体は聞きに来てくれた相手との一対一という関係のおかげと、相手も聞きたくて来てくれているということもあり、なんとか無難にこなすことが出来た。ただし、現在進行形で研究しているテーマでなかったこともあり、発表自体にはそれほどウェイトを置くことはなく、それよりも多くの発表を聞くことを目的とした。このことはポスターに限らず、全ての発表において、自分が少しでも面白いと思ったものは時間の許す限り聞くようにして、知見を広め、今後の自分の方向性の指針を探そう試みた。

今回の学会で発表されていた内容の内訳を見ると口頭発表ではConservationとテーマにつくセッションが3つもあり、ポスター発表でも（申込数では）Conservation and human-related topics というテーマが127と、Ecologyの109を抜いて一番多い。このことより現在の地球をとりまく問題の深刻さとそれに

問題意識を持っている人の多さを伺い知ることが出来る。とはいってもそれほど目新しい発表を見るのが出来なかったのは少し残念である。

多くの発表を聞いて思うことは、プレゼンテーションのうまさである。ユーモアを適度にまじえ、聞いている人を飽きさせず、引きつける工夫がなされていて、非常に聞いていて楽しめるものが多かった。画一的な真面目な発表が多い日本の学会にもこのような発表が増えることを望みつつ、自分でも工夫しないと改めて思っ

た。いろいろと述べてきたが、一番痛感したことは自分の英語の能力のなさであった。ディスカッションを対等に英語で出来なくては駄目だと強く感じた学会であった。

最後に派遣助成をいただいた伊藤基金に深く感謝の言葉を述べたいと思う。

(森林総合研究所・鳥獣管理研究室)

IOCへの初参加(良い経験しました)

黒田 治男

8月14日、どしゃぶりの雨の中私はホテルの送迎バスに乗って成田空港へ向かった。まず、1998年第22回国際鳥学会(IOC)が開催される南アフリカ・ダーバンまでシンガポール航空を利用、途中シンガポールを経由し待ち時間を入れるとおよそ20時間を要す長旅であった。機内では「卓球温泉」が放映されていて英語の字幕に感動した。

会議は8月16日～22日の7日間とその後のツアーが7日間、余分な日を入れると20日間の旅行であった。時差は-7時間、気温は高くても25度だった。過ごしやすく、日本の暑さから逃れてきた感じで、泊まったホテルは、誰かが「湘南の海岸が見える」と言ったようなその名もビーチホテルであった。開催前で時間があつたためダーバンのMUSEUMへも見学することができた。その後日本人7人で、黒人ばかりのレディス・レストランで賑やかに昼食(ピリピリ)をとり、少し街もうろついた。いや、公園を探鳥したのだった。

8月16日いよいよ会場へ出向き、受付で要旨集をもらった。手下げのバックの中は3冊の要旨集ほか諸々入っており、ずっしりと重かった。まず、同行の川路さんから大会に関する注意事項を説明してもらい7日間の予定を考えた。

(では、初めに4ページの「注意事項」から何々、参加登録はすんだ、ポスターは8/16の10時より、それから・・・)この日の予定は、受付と

ポスターを貼るとその後夜6時までフリータイムだった。。そこでポスターを貼るとさっさと昼食を済ませ、ボタニカルガーデンへタクシーを飛ばした。そこでも探鳥。帰り、はじめに送ってもらったタクシーの伯父さんが、時間より早く来てくれて夜のセレモニーに間に合った。このセレモニーで夜食が助かったことと日本人参加者、25人あまりと出会いこころが和んだ。

さて、8月17日からいよいよ緊張した雰囲気の中オープニングが始まった。と思ったが意外と笑いが多く、英語が苦手な私はその笑いの意味もわからず、このときばかりは学会のことよりもつらく感じた。

日々の予定は、午前午後全体にプレナリがあり、シンポが5部屋、口頭発表(Oral)3部屋、そしてラウンドテーブル。ポスターは595件も貼られ、日別に奇数偶数の担当に分けられ発表していた。カテゴリ別にAのBehaviour and bioacoustics ~ JのConservation and human-related topicsまで貼られた間隔も広く見やすかった。口頭発表は、部屋が狭く時間が短く、皆さん早口で話し、内容が十分聞き取れなかったのも、この学会で私は主にシンポに参加した。それはシンポの数が51項目もあったことと、部屋が広くスライドがじっくり見れたからで他に日本からは中村浩志さん、金井裕さんの発表もあった。ラウンドテーブルはもっと悲惨で、ほとんどスライドがなく、ただ話し合

いが続くのでもう少しヒヤリングを勉強してからと感じた。

今回、日本から参加した人達はポスターが多かった。ただ、日本の鳥学会のような賑わいにかけていた。というのも聞く人は分野別にはつきり区別していて、どれもこれもと聞くような人は少なかったように思った。だからポスターの前でじっと立っているだけの人も目立った。もちろんポスターの演者がいないところも目立った。私も聞きたいポスターがあったが、言葉の壁に断念してしまった。

こう書くと学会に参加してもあまり意味がないように思われるかもしれない。しかし、これまで自分が読んだり、引用していた文献の人の名前もみられ、話しを聞けるチャンスがあった。私は、以前、ニューギニアに旅行したあと「風鳥の棲む島」の著書であるBruce.M.Beehler氏と文通をしていたが、ここで始めて会うことができ、本人も私のことを覚えていてくれた。とても感激した。また、ポスターの前ではマンツーマンのところが多く、長い時間論議されていたように見えた。話しの最後では、名刺交換もされていて今後の新たな展開に役立つものと思われた。また、シンポの発表でスライド中に日本の知っている人の名前が引用されていたときに安心して話が聞けた。

やがて7日間の学会も終わり、落雷の歓迎バンケットで幕がおりた。しかし、翌日から7日間のツアーが始まった。この国際鳥学会議では、開催中にもモーニングツアー、それと20日にフリーDayツアーが設けてありとても和やかな会議であった。それ以外にもたくさんのツアーが設定されていた。

私のツアーは南アフリカで主に草原の固有種を15名程で見て回るツアーだった。気温-2度のところもあったが、200種あまりの鳥を観察することができた。ツアー途中でわかったことだが、今回すべてのツアーのガイドは、同じ研究者であり普段ありえないツアーだということだ。ここで大切なことは、ツアーの中でも各国の学者達が意見を交わしていたことだ。特に朝から晩まで食事の時間が長い。このようなとき、日本人は少し浮いてしまうことが残念である。ともあれ、これは西洋風なのである。しかし、「これが南アフリカなんだ！」と体験できました。

最後に「国際鳥学会はお祭り騒ぎの学会」と聞いたが、超アマチュアの私にはその中に含まれる要素が計りしれなく感じた。その反面、「これが日本だ！」という日本鳥学会も楽しみである。4年後は北京で開催される。まず、参加することをお勧めしたい。

1998年 North American Ornithological Conference に出席して

中村 司

北米鳥学会は、アメリカ鳥学会(AOU)をはじめクーパー鳥学会(COS)、ウィルソン鳥学会(WOS)など6つの学会がタイアップして毎年会議を開いており、今年はブッシュスタジアムやゲイトウェイアーチでよく知られているミズーリ州のセントルイスで開かれた。会場はミシシッピ河畔にあるリーガルフロントホテルで4月6日から12日まで行われ、1200人以上が参加した。

著者はAOUもCOSも40年以上の会員であり

ながら一度も参加したことがなかったが、昨年夏38年ぶりに訪ねたカリフォルニア大学バークレー校動物学教室の旧知のジョンソン教授に出会った時、'98年の会議で同教授がAOUの会長を退くとのことだったので初めてながら大会に参加することを約束した。

4月6日は各学会の評議委員会などビジネスミーティングがあり、一般会員は7日から参加者が急増し、その日の夕刻オープニングレセプションがホテルロビーで開かれ、8日朝はミズー

学術会議報告

リ大学総長とミズーリ植物園長らの歓迎の挨拶があった。9日から11日までは毎朝プレナリーレクチャーがあり全員が聴講した。発表はホテル内のそれぞれ当地にゆかりのあるミシシッピなど名の付いた数カ所の会場に分かれて行われた。その他の機器展示室や書籍等の販売室も用意され、それに各学会関係やバードライフインターナショナル、オーデュボン協会などの案内、説明、販売物などもロビーを利用して展示された。発表分野は生態、行動、生理、遺伝、分類、渡り、バンディング、コンサベーションなど、分子生物学からマクロ分野まであらゆる部門にわたり、またアメリカ人以外の参加もあり、さながら国際会議同様の印象を受けた。

数会場の発表が同時進行なので、入れ替わるときなど人の出入りでめまぐるしいほどであった。発表数は口頭とポスターを合わせ1020が数えられた。ポスターセッションは今回会場にスナックが用意されていたこともあってか、すごい混みようで大声を上げないと聞こえない状態で声を囁らしてしまうほどだった。筆者は渡

りを中心にコンサベーション他興味のあるテーマを追って聴講した。ソーシャルイベントとしてはセントルイス動物園とミズーリ植物園に全員参加しレセプションが開かれ世界中の動植物を眺めながら楽しむことが出来た。そのほか湿地の鳥を中心に用意されたエクスカージョンも幾つかあったが時間の都合で参加できなかった。然し学会のあと、異常に増水したミシシッピ河畔でバードウォッチングを楽しんだ。

今回日本からは著者のほか由利たまきさんら留学生の大学院生も2、3参加していてそれぞれ発表しておられた。若手研究者が目立ったことと、講演中でこのままだと21世紀に世界の三分の一の鳥類が消滅するという言葉が頭に残った。

記事が長くなるので会議概要の紹介で終わるが、日本鳥学会員のかかなり多くの方々AOUほか何れかの学会に所属しておられるので、ニューズレターなどでお分かりと思うが来年はニューヨークのコーネル大学で会議が行われることが決まっている。

掲 示 板

野生生物保護学会第4回大会

日時：1998年11月14日～15日

場所：奈良教育大学

問い合わせ：鳥居春己 TEL&FAX: 0742-27-9142, E-mail: torii@nara-edu.ac.jp

日本鳥学会 福岡大会

会期：1998年11月20日（金）～23日（月）

会場：北九州市 北九州大学

第21回極域生物シンポジウム

日程：1998年12月3日（木）・4日（金）

会場：国立極地研究所 講堂

問い合わせ：生物シンポジウム事務局 TEL: 03-3962-4569, FAX: 03-3962-5743

e-mail: iwao@nipr.ac.jp

第17回日本動物行動学会大会

日時：1998年11月21日～23日

会場：東京農工大学農学部

公開招待講演：山元大輔、ショウジョウバエの性行動を制御する遺伝子を探る

問い合わせ：大会事務局 TEL&FAX: 042-367-5623
e-mail: tsatoh@cc.tuat.ac.jp

日本生態学会第46回大会

日時：1999年3月27日～30日
会場：信州大学共通教育センター（松本）
問い合わせ：信州大学理学部生物科学科 TEL: 0263-37-2907（吉田）
E-mail: jes46mt@gipac.shinshu-u.ac.jp

太平洋海鳥グループ1999年大会

日時：1999年2月24～26日
場所：Inn at Semiahmoo, Washington, USA
問い合わせ：Lora Leschner, E-mail leschl@dfw.wa.gov

第8回国際ライチョウシンポジウム

日時：1999年9月13～17日
場所：フィンランド、ロバニエミ
発表を希望する人は1998年12月末までに要旨を提出のこと。なお、詳しくは下記に問合せてください。
Professor Harto Linden, Finnish Game and Fisheries Research Institute, P O
Box 6, FIN-00721 Helsinki, Finland (E-mail: harto.linden@rktl.fi)

シンポジウム「とうきょうのカラスをどうすべきか」

日時：1999年1月17日（日）13時～16時
場所 立教大学5号館1階5122教室、東京池袋 定員250名、参加費1,000円
問い合わせ 日本野鳥の会東京支部（主催）TEL 03-5273-5141、FAX 03-5273-5142

地域活動紹介

北海道鳥学セミナー ～今後に向けて～

長谷川 理

去る平成10年3月7～8日、北海道鳥学セミナーが小樽・おこばち山荘にて開催されました。このセミナーは北海道大学と帯広畜産大学の学生を中心に、北海道内外で鳥の研究や保護活動に携わる人が集まり、年に二回開かれています。今回は出席者32名、発表者10名でした。本セミナーも今回で第10回目を迎え、今後の方向性についていくつかの提案がよせられました。その中から主だった三点を紹介します。

第一に本来の目的である“ゼミ”としての姿勢を取り戻そうということです。互いの研究成果を披露しあうという学会のような形だけに限り定せず、データが不十分であったり考えがまとまっていなくても積極的に発表していこうという姿勢です。自分の所属する研究室以外の人にアドバイスを求められる場を持つというのは、学生にとってたいへん有意義でしょう。次に、レビューの発表を取り入れることです。新たに研究を始める人やこれから論文を書こうという人は、自分の研究テーマの背景、関連事項を勉強しなくてはなりません。その際得た知識をみんなの前で紹介するのは、もちろん自分の研究と関係がなくとも、興味ある事柄を紹介する意欲は大歓迎です。発表者は、人前で話すため

地域活動紹介

に勉強にいつそう熱が入るでしょうし、まとめていくうちに頭の中も整理されるでしょう。一方聞く側は、個々人の絞り込まれた研究内容とは別にもう少し幅の広い知識を得ることができるでしょう。第三にポスター(掲示)を利用することです。これは、セミナーにポスター発表を取り入れるということではなく、例えば学会で使った図や表を掲示して、参加者に話のネタを

提供するのが目的です。あるいは、掲示により自分の欲しい情報を求めるのもよいでしょう。その他、できるだけ参加費を安くしてほしい、でも料理は豪華に、温泉つきで、などという希望もありました。ともかくこれからもより充実したセミナーにしていきたいものです。

(北大・染色体研)

東海地方における鳥類の調査研究グループ・研究者の紹介

石田 朗

今回は東海地方で調査や研究を行っているグループと研究者を紹介します。この地方では鳥を主なテーマとして扱っている大学の研究室や公の研究所はないものの、個人的に研究を行っている人は少ないながらもいますし、地域の野鳥の会などを中心に単なる観察から一步踏み込んだ調査研究に熱心なグループもあります。

愛知、三重などに多くのコロニーがあるカワウの研究を行っているのは、佐藤孝二さん(一宮女子短期大学 〒491-0938 一宮市日光町6 TEL0586-45-2101)を中心としたグループです。ふだんは一人一人が個別のテーマを持ち、ウと人との関わり(名古屋大学古川総合研究資料館報告第5号)、ウの営巣地での森林への影響(Ecological Research vol.11)、繁殖地やねぐらの分布の変化(一宮女子短期大学紀要第33号)などを調べています。その一方で、営巣地でヒナにカラーリングをつけての標識調査では、担当の地域を決めての標識鳥の確認やほかの野鳥観察者からの情報収集など分担してデータの集積を行っています。その結果として、若鳥は自分が生まれたコロニーから分散するしないに関わらず一回繁殖を行った場所に定着する傾向が強いことや若鳥の生まれたコロニーでの生残率は約10%であることなどがわかってきました(1994年度鳥学会大会講演要旨)。

荒木田善隆さん(東京大学愛知演習林 〒489-0031 愛知県瀬戸市五位塚町11-44 TEL0561-82-2371)は、長年にわたり巣箱を使ってカラ類の繁殖生態についての継続的な調

査を行っています。ヤマガラについて12年分の調査結果をまとめた論文が日本鳥学会誌(vol.44-1)に掲載されたのを覚えている方もいるのではないのでしょうか。自然状態で営巣場所のほとんど無い二次林に巣箱をかけた場合、営巣数はほぼ0の状態から数年でピークに達したのちに安定すること、造巣開始日や初卵日はその年の1~3月の平均気温と有意な相関があることなどが明らかにされています。研究は現在も継続中で、もしやる気のある人がいれば一緒に研究しませんかとのことです。これはと思う方は連絡してみてもはどうでしょう。

数少ない学生会員の一人である水谷瑞希さんは、名古屋大学農学部森林保護学研究室(〒464-0814 名古屋市千種区不老町 TEL052-789-4180)の大学院博士課程でカラ類とその餌資源との関係を研究しています。研究室では森林に生息する生物間の相互作用を明らかにしたり、その成果を森林の健全な維持・管理に生かすことを目的とした研究が行われていますが、昆虫や菌類から哺乳類や魚類まで幅広い研究材料の中で鳥を扱っているのは現在水谷さん1人です。樹冠下のトラップに貯まった落ち葉の中から樹上にいる小動物が落とした糞をよりわけたり、樹上で採取した枝葉の中から小動物を取り出して分類したりと地道な作業をこなしています。これまでに、カラ類の主要な餌資源となっている鱗翅目幼虫(いもむしや毛虫の類)はスギや広葉樹の林よりもカラマツ林に多いこと、カラ類の中でシジュウカラだけがカ

ラマツ林以外の林で鱗翅目よりも直翅目（バッタの類）の昆虫を多く利用するケースがあることなどがわかってきています（1997年度鳥学会大会講演要旨）。

このほか、愛知県のバンダー（鳥類標識調査者）の顔とも言うべき真野徹さん（TEL 05617-4-5958）は、渥美半島をはじめとした地元で標識調査を行う一方、ウグイスの地域個体群の比較研究（主に形態について）を行っています。これまでに南西諸島での調査を終え、

今後は九州以北の個体群も手がける予定とのこと。東三河野鳥の会（連絡先：稲田浩三 TEL0532-52-5456）では、渥美半島の数カ所ですらで長期にわたって定点調査を実施しています。また、会のメンバーが中心となって20年以上続いている伊良湖岬の秋の渡り鳥調査（9月下旬から11月中旬までの毎週実施）により、ワシタカ類だけでなくそのほかの多くの小鳥類もこの地を渡っていくことが明らかになってきました。

意見

前号のニュースに掲載された将来計画ワーキンググループの中間報告について次のような意見が寄せられました。公開された意見交換の場としてニュースを利用してくださることを歓迎します。

黒田治男さんから

将来計画ワーキンググループの中間報告ありがとうございます。最近の鳥学会誌は英文のものが多いですね。もちろんそれは国際的にきちんと評価される内容を重視しているためだと思います。しかし、私にしてみれば日本の学会誌でありながら、日本語があまりにも少なく理解しにくいのです。以前私は「Strix」誌に投稿したことがあります。「Strix」誌は和文論文も多く、勉強になりました。こうすれば自分の持っているデータが役立たせられる、これなら書けると勇気づけられました。毎年行なわれる鳥学会大会は議論の場で盛り上がっています。鳥学会誌も同じ土俵で議論したいのです。しかし、今の日本鳥学会誌は英語のものも多く議論に参加しづらいのです。このたび国際鳥学会に参加し、共通語は英語でそれでないとは論議できないことを痛感しました。しかしながら、国内の学会誌である以上もっと日本語、和文を大切にしていっていただけませんか。

大城明夫さんから

将来計画ワーキング・グループ中間報告を興味深く拝読しました。さまざまなテーマについて、詳細にわたって議論されている姿が明確に伝わってきます。鳥学会の将来について、心配

しているのは一平会員も同様です。「講演要旨のフリーゾーン化」について関西の「アルラ」の幾人かのメンバーと意見交換をおこなった事がありました。主に私の個人的な意見ですが、鳥学会の活動のなかでいちばん面白く楽しい場は、講演要旨と大会での発表ではないかと考えています。特に講演要旨集は、演者、研究者の活動、テーマ、主張、論議等がエッセンシャルに伝わってきます。要旨内容を4ページくらいまで書けるようにすると、要旨集自体がより面白いものになるのではないのでしょうか？さらに、そのなかから、是非、論文等にまとめてもらいたい研究や成果を「論文作成協力委員会（仮称）」が選抜し、論文作成を打診していくシステムを設けてはどうか、というのが私の意見です。「論文作成協力委員会（仮称）」は学会誌編集委員会とは異なり、体裁や権威にこだわらず、「フリー」、「ノー・チェック」、「著者の自己責任」を基本として、論文作成の手助けをしていく委員会と考えています。このように、講演要旨集をフリー・ゾーンとしてとらえ、そこから輝くものを育てるという発想は、鳥学会の発展よりいっそうの発展につながると考えます。

お知らせ

調査員募集

長野県北部のブナ林で鳥類群集の調査を行っています。来シーズン以降、以下の条件で調査研究に参加できる方があれば早急にご一報下さい。

1) 調査目的: ブナ林の各種小鳥を中心とする群集構造の研究、2) 場所: 長野県カヤの平ブナ林(志賀高原の北側、標高1,400mの山地)、3) 期間: 4月下旬から7月中旬まで、及び、10月中下旬の約1週間、4) 宿泊: カヤの平ロッジ(食事・風呂付き)に泊まり込み、5) 条件: 調査チームで長期一緒に過ごすのに必要な協調性と研究意欲をあわせもった学部学生もしくは修士課程の学生、6) 研究テーマ例: 調査ブナ林の優先種であるヒガラの繁殖生態および種間関係の解明、7) 問い合わせ先: 堀田昌伸 長野県自然保護研究所 〒381-0075長野市北郷2054-120、TEL 026-239-1031(代)、FAX 026-239-2929、e-mail: himeama@nacri.pref.nagano.jp
(姫路工業大: 江崎保男、長野県: 堀田昌伸)

文献リストとIOCアブストラクトのWWWサイト

いままでAOU/BOU/RAOUが協同で印刷し発行していたRecent Ornithological Literatureは、今後Webに移行します。すでに昨年の10月号からスミソニアン研究所のサイト(<http://www.nmnh.si.edu/BIRDNET/ROL/>)に公開されています。22回国際鳥学会(ダーバン)のアブストラクトは<http://www.ioc.org.za/>で公開されています。次回の中国大会まではサイトが維持されます。(永田尚志)

事務局より

田村 健一、中条 正英、京谷 直喜、池谷 英二郎

上の方々の住所が不明となっております。事務局までお知らせ下さい。

編集担当より

掲示板(学術会議案内や小さな集会、シンポジウムの案内も含みます)、地域の研究グループ紹介、その他寄稿は

e-mail: ywata@res.agr.hokudai.ac.jp、FAX: 011-757-5595

までお寄せ下さい。(綿貫)

次の締め切りは12月末日です。

鳥学ニュース No.69

1998年11月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒080 帯広市稲田町西2線11 帯広畜産大学 野生動物管理学研究室気付

TEL. 0155-49-5500 FAX. 0155-49-5504 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 藤巻裕蔵

編集 綿貫 豊